

青べか物語

山本周五郎



青べか物語

山本周五郎

文藝春秋新社

青べか物語



昭和三十六年一月二〇日 発行

定価二六〇円

著作者 山本周五郎

発行者 車谷弘

発行所 文藝春秋新社

東京都中央区銀座西八ノ四
番八七四三番
振替口座東京

万一落丁乱丁の際は
お買求めの書店又は
発行所にてお取替致し
ます

印刷 精興社
色刷 凸版印刷
製本 加藤製本

目

次

はじめに	七
「青べか」を買った話	一〇
蜜柑の木	一九
水汲みばか	二九
青べか、馴らし	三五
砂と柘榴	四八
人はなんによつて生くるか	五九
繁あね	六五

土堤の春	七五
土堤の夏	七七
土堤の秋	八〇
土堤の冬	八二
白い人たち	八七
ごったくや	九六
対話（砂について）	一〇五
もくしゅう	一一〇
経済原理	一二〇

朝日屋騒動	一二八
貝盗人	一三八
狐火	一四五
芦の中の一夜	一四九
浦柏の宗五郎	一六四
おらあ抵抗しなかつた	一七〇
長と猛獣映画	一八三
SASE BAKA	一八七
家鴨(あひる)	一九〇

あいびき	二〇一
毒をのむと苦しい	二〇五
残酷な挿話	二一八
けけち	二二四
留さんと女	二二六
おわりに	二三九
三十年後	二四五

装 幀 佐野繁次郎

口 絵 写真 林 忠彦

青
べ
か
物
語

はじめに

浦粕町は根戸川のもっとも下流にある漁師町で、貝と海苔と釣場とで知られていた。町はさして大きくはないが、貝の罐詰工場と、貝殻を焼いて石灰を作る工場と、冬から春にかけて無数にできる海苔干し場と、そして、魚釣りに来る客のための釣舟屋と、ごったくやといわれる小料理屋の多いのが、他の町とは違った性格をみせていた。

町は孤立していた。北は田畑、東は海、西は根戸川、そして南には「沖の百万坪」と呼ばれる広大な荒地がひろがり、その先もまた海になっていた。交通は乗合バスと蒸気船とあるが、多くは蒸気船を利用し、「通船」と呼ばれる二つの船会社が運航していて、片方の船は船艀を白く塗り、片方は青く塗ってあった。これらの発着するところを「蒸気河岸」と呼び、隣りあっている両棧橋の前にそれぞれの切符売り場があった。

西の根戸川と東の海を通じる掘割が、この町を貫流していた。蒸気河岸とこの堀に沿って、釣舟屋が並び、洋食屋、ごったくや、地方銀行の出張所、三等郵便局、巡査駐在所、消防署——と云っても旧式な手押しポンプのはいつている車庫だけであったが、——そして町役場などがあり、その裏には貧しい漁夫や、貝を採るための長い柄の付いた竹籠を作る者や、その日によって雇われ先の変る、つ

まり舟を漕ぐことも知らず、力仕事のほかには能のない人たちの長屋、土地の言葉で云うと「ぶっくれ小屋」なるものが、ごちゃごちゃと詰めあっていた。

町の中心部は「堀南」と呼ばれ、「四丁目」といわれる洋食屋や、「浦粕亭」という寄席や、諸雑貨洋品店、理髪店、銭湯、「山口屋」という本当の意味の料理屋——これはもっぱら町の旦那方用であるが、そのほか他の田舎町によくみられる旅籠宿や小商いの店などが軒を列ねていた。その南側の裏に、やはり「ごったくや」の一劃があり、たった一軒の芝居小屋と、ときたま仮設劇場のかかる空地がある、というぐあいであった。

これらのことをどんなに詳しく記したところで、浦粕町の全貌を尽すわけにはいかない。私も決してそんなつもりはないので、ただこの小さな物語の篇中に出てくる人たちや、出来事の背景になっているものだけを、いちおう予備知識として紹介したにすぎないのである。

はじめに「沖の百方坪」と呼ばれる空地が、この町の南側にひろがっていると書いた。私は目測する能力がないので、正確にはなんともいえないが、そこは慥かにその名にふさわしい広さをもっていた。畑といくらかの田もあるが、大部分は芦や雑草の繁った荒地と、沼や池や湿地などで占められ、そのあいだを根戸川から引いた用水堀が、「一つ汊」から「四つ汊」まで、荒地に縦横の水路を通じていた。——この水路や沼や池には、鮎、鯉、鮭、鯰などがよく繁殖するため、陸釣りを好む人たちの取って置き場所のようであった。また、沼や池や芦の茂みの中には、獺とか鼬などが棲んでいて、よく人をおどろかしたり、なにごとでもすぐに信ずるような、昔ふうの住民を「隙さえあれば化かそうと思っている」ということであった。

この町ではときたま、太陽が二つ、東と西の地平線上にあらわれることがある。そういうときはすぐにもそっぽを向かなければ危ない。おかしいことがあるものだ、などと云って二つの太陽を見ると「うみどんぼ野郎」になってしまう。そうしてそのときにはすぐ脇のほうで、獺か鼬の笑っている声が聞えるということである。特に鼬はたちの悪いいたずら好きで、人が道を歩いていると、ひよいと向うへとびだして来て、立ちあがって、交通整理でもするように、右手をあげて右をさし示したり、左手で左のほうをさしたりする。そうしたら必ず反対のほうにゆかなければならない。うっかりしてそちらへゆけば、きまって池か堀か、わるくすると根戸川へ落ちこんでしまう、といわれていた。

百方坪から眺めると、浦粕町がどんなに小さく心ぼそげであるか、ということがよくわかる。それは荒れた平野の一部にひらべったく密集した、一とかたまりの、廃滅しかかっている部落といった感じで、貝の罐詰工場の煙突からたち昇る煙と、石灰工場の建物ぜんたいを包んで、絶えず舞いあがっている雪白の煙のほかには、動くものも見えず物音も聞えず、そこに人が生活しているとは信じがたいように思えるくらいであった。

私はその町の人たちから「蒸気河岸の先生」と呼ばれ、あしかけ三年あまり独りで住んでいた。

一「青べか」を買った話

芳爺さんに初めて会ったのは「東」の海水小屋であった。冬のことで、海水小屋は取払われ、半分の朽ちた葺簾よしずの屋根と、板を打ちつけた腰掛が一部だけ残っていた。町を西から東へ貫流する掘割が、東の海へ出る川口のとこで、土地の人たちはそのあたり一帯を漠然ばくぜんと「東」と呼んでいた。

私は海を眺めていた。腰掛は釘がゆるんでいるので、足を突っ張ってうまく支えていないと、すぐさま潰れてしまいそうであった。干潮で、遠浅とあさの海は醜い底肌を曝さらし、堀の水は細く、土色に濁っていた。急に腰掛がぐらっと揺れたので、私は吃驚びっくりして、突っ張っている足に力を入れながら振返った。すると一人の老人が、すぐうしろに腰を掛けて、私などは眼にもはいらないといったような顔つきで、古風な蓑入たごいれを腰から抜くところであった。私は支える足に気をくばりながら、また海のほうへ眼を戻した。

「ずっとめえに、ここへなにかぶっ建てようと思ったっけだが」と老人が大きな声で云った、百メートルも先にいる人に話しかけるような声であった、「なんかぶっ建ててくれべえと思ったっけだがねえよ」

私は黙っていた。私は老人しか見なかったが、それではもう一人伴つれでもいるのか、と思ったので

ある。しかし答える声はなく、老人はやかましい音をさせて煙管をはたき、次のタバコを吸いつけた。煙管はつまっていて、喘息患者の喉のように、ぐすぐすとやにの鳴る音が聞えた。

「ずっとめえのこった、おつゆのおっかあがまだ綿屋へ嫁にいかねえころのこった」と老人は大きな声で云った、そしてやや暫く黙っていてから、また煙管をはたき、三服めを吸いつけて、喚きたてた、
「なんにもおっ建たなかっただよ」

私はやはり黙っていた。

二度めには百万坪で会った。季節は春で、強い風が吹いていた。私は「二つ入」の堀に沿った道を、沖の弁天社のほうへ歩いていった。なんのふぜいもない、だだっ広いだけのその荒地のほぼ中ほどに、無人の、小さな、毀れかかったような古い社が、ひねこびた六七本の松に囲まれて建っている。いつのころかたいへん流行った弁天で、特に各地の花柳界の女性たちが参詣に列を作ったそうである。どういう霊顯があつたのか土地の者は知らない、ただひところばかげて流行り、夥しい参詣者の絶えなかったことと、当時その境内が別世界のように賑わったということだけは、子供たちでさえよく知っていた。

潮の匂いのする強い風に吹かれながら、沖の弁天のほうへ歩いていったとき、うしろからいきなり大きな声で呼びかけられ、私はとびあがりそうに驚いて振返った。あの老人がすぐうしろにいた。継ぎはぎだらけの、洗い晒しためくら縞の絆纏に、綿入の股引をはき、鼠色になった手拭で頬かぶりをしている。それはこの土地の漁師たちに共通の常着であるが、もう綿入の股引をはく季節ではなかった。「おめえ舟買わねえか」と老人は私と並んで歩きながら喚いた、「タバコを忘れて来ちまっただが、お

めえさん持つてねえだかい」

私はタバコを渡し、マッチを渡した。老人はタバコを一本抜いて口に咥え、風をよけながら巧みに火をつけると、タバコとマッチの箱をふところへしまった。

「いい舟があんだが」と老人は二百メートルも向うにあるひねこびた松の木にでも話しかけるような大きな声でどなりたてた、「いい舟で値段も安いもんだが、買わねえかね」

私が答えると、老人は初めからその答えを予期していたように、なんの反応もあらわさず、吸っていたタバコを地面でもみ消し、残りを耳に挟んでから、手漬をかんだ。

「おめえ」暫く歩いたのち、老人がひとなみな声で云った、「この浦粕へなにようしに來ただい」

私は考えてから答えた。

「ふうん」と老人は首を振り、ついで例の高ごえで喚いた、「おんだらにゃあよくわかんねえだが、職はあるだかい」

私が答えると、老人はちよつと考えた。

「つまり失業者だな」と老人は喚いた、「嫁を貰う氣はねえだかい」

私は黙っていた。別れるときマッチだけ返してもらったが、急に耳の遠くなった老人は、二度も三度も私の云うことを訊き返し、そのため私は自分がひどい吝嗇漢になったような、恥かしさを感じた。

三度めは根戸川亭で会った。それは蒸気河岸にある洋食屋で、土間が食堂、奥に座敷があって、夜になると蒸気船（通船といわれていた）の船員や漁師たちが、しばしば盛大に酔って騒いだ。或る日の午ごろ、私が食堂のがたがたする椅子に掛け、一本のビールでカツ・ライスを喰べていると、老人が

私の卓子へ来て差向いの椅子に掛けた。

いまでもそうであるが、外で食事をするときには、私はなにか読みながらでないとおちつけない癖がある。そのときも私は青巻という本を読んでいて、老人がそこへ腰掛けたものだから、いっそう熱心に読むふりをし、そうして本から少しも眼を放さないままで、トンカツを嚙んだりビールを啜すすっていた。

女が座敷のところへ来て、「芳さんなんにするだえ」と呼びかけた。

「うう」と老人が答えた、「おっかあがいねえからめし食うべえと思つて来ただが、うう、なんにすべえか考げてるだ」

「うちじゃあ考げえるほどごたいそんなものは出来ねえよ」

すると老人が私を見ながら、——そこへ腰掛けたときからずっと、老人が私をみつめ続けていることを私は知っていた、——で、老人は私の顔を見ながら、例のずばぬけた高ごえで喚きたてた。

「ビールをコップに一杯くんねえかね」

「ビールを一杯だつて」と女が云った、「おらそんなこと聞いたこともねえ、酌ちやくのまちげえじゃねえのかえ」

東京へゆけばビールの一杯売りをやっている、と老人が云った。それはビヤホールというものだ、と女が云った。いや、トンカツやカレーライスが出来るから洋食屋と違ひはない、と老人が云った。

一杯売りをするのは生ビールといって、樽で来るから一杯ずつでも売れるが、壘詰びんづめはあけてしまえばあとが、かんのんさまだから一杯だけ売るわけにはいかないのだ、と女が云った。あとが、かんのんさま

になつてもしょうはいは損して得取れということがある、と老人が喚きたてた。

私は縛りあげられ、罨おにはまったことを知った。まだ三分の一ほど残っているビール壺を、老人のほうへ置き直しながら、私は云わなければならないことを云った。

「そうかね」と云うより早く老人は女に向つて喚きたてた、「コップ」

それから私を見て「タバコの持ち合せはねえかね」

私が答えると、老人は「なに、いま欲しかねえだよ」と云った。

釣舟宿の「千本」の三男の長ちやうから、私は老人のことを聞いた。その土地の出来事について、籠屋のおたまと「千本」の長とが、つねにぬかりなく情報を呉れるのである。おたまも長も小学校の三年生であつた。——老人の名は芳、夫婦つきりで、三本松の裏に住み、「大蝶」の倉庫番をしている、というのであつた。「大蝶」はその町でいちばん大きく貝の罐詰工場を經營してい、漁師たちの採る貝を沖で買い取るために、大蝶丸という船を持っていた。

私の問いに答えて、長はつよく首を振つた。

「ううん、そんなこたねえだよ」と長は云つた、「工場はやかましかんべ、だからみんなえつけえ声になつちまうだ」

えつけえとはもちろん大きなという意味である。長はなお「芳爺さまはそら耳を使う」と云つたが、それはもう私の知っていることであつた。

それからのちもときどき道で会つたが、老人は挨拶もしないし、私を見ても棒杭か石ころでも見るような眼つきしかなかった。頬かぶりをとつた老人の顔は、瘦せていて小さく、太陽と潮風にやけ